死人の手

田中貢太郎

青空文庫

目次

作者より 6

此の話は、私が少年の時、隣家の老人から聞いた話であります。其の老人は、壮(わか)い時師匠について棒術を稽古しておりましたので、夏の夜など私に教えてくれると云って、渋染にした麻の帷子の両肌を脱いで、型を見せてくれました。ちっぽけな私は、老人の云うなりに、長い太い樫の棒を持って前へ出て、かちかちと老人の棒に当てました。棒は敵の頭と股間を狙って打ち込むのであります。

「もっと、力を入れて、もっと、力を入れて」

と、老人は云いました。私が顔を真紅にして、一生懸命に打ち込んでまいりますと、

「そう、そう、そうだ」

と、云って老人は褒めてくれました。そんな老人でありますから、旅行するには竹の中へ未込銃(うちごめ)のすやを仕込んだ杖などを持って往きました。其の老人が某日(あるひ)物置の庭で、縄を綯いながら話してくれた話は、老人が己(じぶん)で知っている話か、それとも何か書物にでもあった話か其処は私には判りません。

路は谷に沿うておりました。其の路を一人の旅人は、上へ上へと登りながら前の方を見ますと、円い膨らみのある山が重なっておりました。もう夕方で、微紅い陽が渓(たに)のむこう側に落ちかけておりました。山には秋が来て、路ばたの櫟や栃などの樹は、黄ろく色づいていて、風もないのにばらばらと降りかかりました。栗の毬蕚(いが)がはじけて、樺色の実が路の上に落ちている

処もありました。これが浅い山であったら、拾ってみる気にもなるでありましょうが、深い山の中で、それでさきを急ぐ旅でありますから、そんな物に眼をつける余裕はありません。どうかして、早く其の山を越して、むこうの村に着きたいと云う考えで、心が一ぱいになっておりました。

旅人は疲れた足を休めずに、登り続けました。何時の間にか足もとで鳴っていた渓川の水の音が聞えなくなって、渓は遙の下の方になってしまいました。

峠に近くなったところで、日が暮れて四辺（あたり）が微暗くなりました。何と云う鳥であろう、けけけと鋭い声で鳴きましたが、それが鳴きやむと其の後は寂然（ひっそり）となりました。峠の上の方を見ますと、星が二つ三つ淋しそうに光っておりました。旅人は途方にくれましたが、後へ帰るにしても人家のある処へは、一里ばかりもありますので、暗い路を足探りに探って、上へ上へと登りました。

五六町ばかり登ったところで、路が平坦（なだらか）になりましたから、もう峠となったなと思っておりますと、火の光が見えて家らしい物が眼に入りました。旅人は悦しくて踊り出したいような気になって、其処へ寄って往きました。

狭い板葺の家の中に、主人らしい男が地炉（いろり）に火を焚いておりました。旅人は縁前へ往って、「むこうの村へ往く者でありますが、泊めていただくことはできますまいか」と云いました。「ちょうど好い処へ来た、私はちょっと下の村まで往って来ねばならんから、留守居をしてお

くれ」と、主人(あるじ)が云いました。

旅人は草鞋を解いて、簀子を敷いた縁側を跨いで地炉の傍へあがりました。主人は自在鉤につるして火の上にかけてあった茶釜から、茶を汲んでくれました。旅人は茶碗を見ると、今まで忘れていた咽喉の乾きをおぼえましたので、礼を云い云い、それを一息に飲みました。

「実は今日夕方、女房が病気で死んだから、下の村にいる親類へ知らして来たいと思うたが、何人(たれ)も留守居をしてくれる人が来ないから、困っていたところだ、此処でゆっくり寝ておくれ」と主人が云いました。

旅人は大変な処へ来あわしたものだと思って、心では後悔しましたが、人情として厭とは云えないし、もしまた厭と云えば、其処を出なければなりませんが、真暗に暮れてしまっては、とても一歩(ひとあし)も往けません、旅人はしかたなく「宜しゅうございます」と、云って主人の背後(うしろ)の方を見ました。亡くなったと云う女房でありましょう、二枚折の小さな屏風を逆さにした陰に、蒲団をかけて寝ている者がありました。

主人は棚から皿に盛った物をおろして来て、

「飯があると好いが、飯は今晩喫ってしまったから、此の、枕団子のあまりでもあげよう」と、云って前に置いてくれました。それは粟の団子でありました。

こうした場合、こんな団子を他の家で出してくれたなら、どんなにか嬉しいか判りませんが、死人が鬼魅の悪いうえに、死人の枕頭に置いた枕団子のあまりだと聞いては、とても口にする

気にはなりません。で、

「私は、下の村で数多物(たくさん)をたべて来ましたから、まだ何もたべたくはありません」と云いました。

主人はそれをほんとにしました。

「そんなら、腹が空いて来たら喫うが好え」と云って、それから壁厨(おしいれ)を開けて、一枚の薄い蒲団と木の枕を出して来て、旅人の傍に置きました。

「これから一走り往ってくるから、寝ておくれ」

旅人は小さな声で返事をしました。主人は小さな松明に火をつけて、草履を穿いて出かけました。旅人は地炉にかけた茶釜を見つめながら、主人の跫音に耳をやっておりましたが、其の跫音は次第次第に遠退いて、やがて聞えなくなりました。

旅人の眼は、死骸の方に往きました。地炉の火のぼんやりさした死骸の頭はむこう向きになって、此方には束ねた黒髪がありました。枕頭には、己(じぶん)の前にある団子と同じ色の団子を盛った皿が置いてありました。旅人はそれを見まいとして、急いで眼を茶釜の方に移しました。

何時の間にか風が出て、裏の方で何かかたかたと鳴りました。旅人の体はぞくぞくとして、水をかけられたようになりました。旅人はふと気が注いて、「こんな臆病なことではならん」と思いました。で、強いて気を落着けようとして腹部に雙手を当てました。それでも死骸を見るのは鬼魅が悪いので、眼は茶釜より他にはやりません。

しかし、何となしに死骸の方が気になります。やらないとしても、其の眼は何時の間にか死骸の方に往きます。旅人はまた、「こんなことでどうする、男じゃないか、こんなことが怖くてどうする」と思って、強いて勇気を出そうとしましたが、其の一方から死骸のことが気になりだしました。

旅人の頭に、髪を揮り乱した真蒼な顔をした怪しい姿が映りました。旅人は唇を噛みしめて眼をつむりました。そして、気が稍静まったので眼を開けました。其の眼は、また死骸の方へ往きました。

ちょうど其の時でありました。死骸の顔のある方から蒼白い痩せこけた一本の手がすうと出て、枕もとの団子を一つ掴んで引込みました。旅人の頭には血が登りました。旅人はふらふらとなって縁側に出ましたが、逃げ出すのも恐ろしいので、縁側に腰をかけて、怖ごわまた死骸の方を見ました。と、冷たい氷のような毛もくじゃらな手が縁の下から出て、旅人の右の足を撮みました。旅人はもう気を失いました。

「おい、おい、どうした」と云って、揺り起す者の声に、旅人は正気づいて眼を開けました。傍には下の村へ往った主人(あるじ)が、二人の男といっしょに立っておりました。

「どうした、どうした」と、主人はまた云いました。

旅人は縁側に仰向きになって倒れておりました。

「ああ、ああ」と、旅人はそれからさきは云わずに顫えておりました。

「どうした、何か怖いことがあったか、下からも人が来て呉れたから、もう何も怖いことはない」と、主人が云いました。

旅人は起きあがりました。

「まあ、上へあがるが好い」と、主人は己(じぶん)で上へあがりながら、伴れて来た二人にも、「さあ、あがってくれ」と云いました。

旅人も気が丈夫になったので、おずおずと地炉の傍へ寄りました。

「どうした、どんなことがあった」と、主人は問いました。

「其処から蒼い手が出て、団子を執りました」と、旅人は恐る恐る死骸の方へ手をやりました。

主人は判ったと云うような顔をしました。

「いや、それは気の毒なことをした、小供が母親が死んだと云っても、どうしても聞かずにいっしょに寝ると云うから、寝さしてあったから、それが執ったものだ、何も怖いことはない」と、云って主人は起って往って、死人にかけてある蒲団をまくりました。

其処には死人の胸にだきついて、四つばかりの小供が睡っておりましたが、隻手には何か握っておりました。

「執ったなりに、喫わずに持っている」と、主人は悲しそうな声で云いました。

旅人はそれでも安心ができませんでした。

「それから他に何かあったかな」と、主人が云いました。

「縁側に腰をかけると、冷たい毛もくじゃらの手が足にかかりました」と、旅人は云いました。

すると主人は淋しい笑い声を立てました。そして、主人は縁側に往って、敷いてある簀子を剥いで、

「これだ、これだ」と云いました。

旅人は何んであろうかと思って、傍へ寄って往きました。十匹位の子猿が簀子を剥いだ音に驚いて、暗いなかに坊主頭を見せてがさがさ騒いでおりました。

青空文庫情報

底本：「日本怪談全集　※［#ローマ数字2、1-13-22］」桃源社
　1974（昭和49）年7月5日発行
　1975（昭和50）年7月25日2刷
底本の親本：「日本怪談全集」改造社
　1934（昭和9）年
入力：Hiroshi_O
校正：大野裕
2012年10月15日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

死人の手

田中貢太郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/